

# ～富士山につなぐ道～

大月市から富士吉田市までを通る道。江戸時代に整備された日本橋を起点とする五街道の一つ・甲州街道から大月宿で分岐し、富士山へと向かう道が富士道です。郡内地域(富士北麓・東部地域)の交通・物流の動脈として機能した道で、郡内地域の政治・経済・文化の中心であった谷村(現在の都留市)につながる道という意味で、谷村路とも呼ばれます。

郡内地域の特産品の一つに郡内織という、きめ細かく上質な絹織物があります。山間で平地が少なく、気候も寒冷なため稲作にあまり適していない郡内地域では、古くから養蚕や絹織物生産が行われていました。富士道は郡内織の流通ルートであり、道沿いの村々で織られた郡内織が、この道を使って江戸・京都・大阪といった大都市へと出荷されました。

江戸時代になると江戸の町で富士講が盛んになります。人々は富士山山頂には神仏が住まうと考え、こぞって富士山の頂を目指しました。江戸の富士講の人々が自分の足で歩いたのがこの富士道です。

現在は、国道139号(愛称:富士みち)、富士急行線が通っています。



大月市から富士吉田市方面を望む

## 富士山と富士道のつながり

### 富士信仰：江戸の富士講が富士山を目指して歩いた道

荒々しい噴火活動を繰り返す富士山には、古くから神仏が住まうと考えられていました。噴火が収まると共に富士山に登る人々が現れ、江戸時代には一般庶民にまで普及、富士講という富士登山をする人々のグループが生まれました。「江戸八百八町に八百八講」と言われたほど、多くの富士講の人々が富士道歩いて富士山頂を目指しました。

### 郡内の機織り：富士山由来の地形・気候に適した織物産業の展開と流通の道

南からの暖かい空気が富士山に遮られる寒冷地のため農業に適さない郡内地域では、古くから養蚕・絹織物生産で生計を立てていました。富士山がもたらす豊富な伏流水は染め物に使うと発色が良く、比較的雨の多い気象条件は織物に適した環境を生み出しました。道沿いの集落で生産された織物は富士道を使って大都市へ出荷され、庶民の人気を集めました。



#### 富士講の装束

富士講信者にとって富士山は「あの世」と考えられていました。富士山へ登ることは一度死んで生まれ変わることであり、そのため死装束と同じ白衣の行衣を身に付けました。



#### 御師

御師とは、富士山への登山参詣者に宿を提供して心身を清める祈禱などを行っていた宗教者のこと。夏の間、御師は自宅を開放して富士信仰者を受け入れ、食事や不浄祓いの祈禱、登山の案内などの世話をしました。

冬場には、各地の富士講のもとへと足を運んで富士信仰の布教に努めました。

#### 富士山に真向かう二つの町 上吉田・下吉田コース

#### 富士講と養蚕

富士信仰の教えでは養蚕が重要視されました。富士講発展の契機をもたらした行者・食行身祿は、「浅間大菩薩は蚕の神」「日本は桑をもって人を助ける「扶桑国」である」という教えを残しました。

明治以降の宗教政策の中で、各地の富士講は「扶桑教」として統一が図られました。

#### 富士の麓の小さな城下町 谷村コース

#### 富士山湧水の里 夏狩コース

#### 水音に織機の音が重なる 西桂コース

#### 郡内織の歴史①

郡内では古くから織物生産が行われており、永年の歴史を持ちます。大航海時代に舶来の織物の影響を受け、大きく発展したことも分かっています。

江戸時代になると、高品質でありながら比較的手の届く価格だった郡内織は、都市の町人たちに大人気となりました。特に、先染めの糸で縞柄を織り出した郡内縞の人気は高く、当時の文芸作品には郡内縞を取り扱う店が繁盛する様子が描かれ、浮世絵の中にも郡内縞ではないかと思われる作品が見られます。

郡内織の一つである「カイキ(海気・海黄・改機など)」という織物は、細い糸を高密度で織り込んだ非常に高い技術で生み出される織物で、薄くて軽いのにハリコシがあり丈夫なことから、羽織の裏地(羽裏)として使われました。

奢侈禁止令が出されていた江戸時代、庶民は派手な着物を着ることができませんでした。人々は表からは見えない裏地に工夫を重ね、オシャレを競っていました。

このカイキは、明治になると、甲斐の国で織られる織物という意味で「甲斐絹」と称され、明治～昭和にかけて大ブームとなりました。

#### 郡内織の歴史②

戦時中は思うように織物生産ができない時期がありましたが、戦後になると「ガチャッとひと織りすると一万円儲かる」とも言われ、「ガチャ万景気」と呼ばれた好景気に沸きました。しかし、次第により安い価格で製造できる海外にシェアを奪われてしまいます。

ガチャ万景気の頃、この地域では、様々なブランドの商品を自分の会社名を出さずに下請け製造するOEM生産が中心で、江戸時代には浮世絵や小説に登場するほど有名だった郡内織は、織物産地としても知られなくなってしまいました。

現在は、こうした状況を変えていこうと、自社ブランドの立ち上げや、デザイン系大学とのコラボレーション、「ハタオリ」をテーマにしたイベント開催など、様々な取り組みが積極的に行われています。



大正時代の絵甲斐絹



ハタオリまつりフェスティバル